

「日琉諸語の疑問・不定表現をめぐる韻律現象：類型論的枠組みの提案と通時的考察」について

五十嵐陽介 (国立国語研究所)

y.igarashi@ninjal.ac.jp

1. はじめに

日本言語学会第 163 回大会ワークショップ「日琉諸語の疑問・不定表現をめぐる韻律現象：類型論的枠組みの提案と通時的考察」(2021 年 11 月 21 日；企画者、佐藤久美子) にコメントする。本ワークショップは企画者が提起した日琉諸語の疑問・不定表現における韻律現象をめぐる諸問題 (e.g. Sato 2018; 佐藤 2019) を、分析対象を大幅に広げて、類型論的、通時的観点から検討するものである。分析対象は九州 (佐藤発表)、琉球列島 (セリック発表)、日本列島中央部 (中澤発表) の諸方言である。3 つの発表が共通の枠組みに基づいて分析を行っているため、問題の韻律現象を諸方言間で対照することが可能となっている。その結果、問題の現象に関する多くの知見が得られ、また将来の課題も明確にされており、当該分野の研究の発展を期待させる。本稿では、佐藤発表 (佐藤 2021b) 第 4 節で行われている類型論的考察を中心にコメントする。

2. コメント

佐藤発表 (佐藤 2021b) では、疑問・不定表現における韻律現象の類型化を試みている。それは表 1 の形に要約できる。(以降の議論のために一部表現を変更している。以降、「不定表現」は全称量化不定文と譲歩文のことを指し、存在量化不定文はそこから除かれる。)

表 1. 佐藤 (2021b) による類型化

	A 方言	B 方言	C 方言	D 方言	E 方言	F 方言
疑問詞のアクセント型の対立	✓	✓	✓			
不定表現 (隣接) における不定語の平坦音調		✓	✓	✓	✓	✓
不定表現 (非隣接) における不定語の平坦音調			✓	✓	✓	✓
不定表現における平坦音調の拡張					✓	✓
疑問表現における平坦音調の拡張						✓

A 方言 田辺・富山・与那覇 B 方言 南さつま・皆愛 C 方言 京都・淡路・南国・多良間・与那国
D 方言 老岐・東京 F 方言 福岡

表 1 より佐藤 (2021b) は (1) の含意関係が認められること指摘する。

- (1) a. 不定表現 (非隣接) における不定語に平坦音調が現れる方言は、不定表現 (隣接) における不定語にも平坦音調が現れる。
b. 疑問表現に平坦音調の拡張を起こす方言は、不定表現にもそれを起こす (佐藤 2019a; 五十嵐 2021)。

しかし、表 1 に認められる含意関係は (1) だけではない。言語的特質の分布に認められる含意階層は変化の順序に示唆を与えるので、これを詳細に分析することは類型論および通時論にとって重要な示唆を与える。

第 1 に、「不定表現に平坦音調の拡張を起こす方言、不定表現 (非隣接) の不定語に平坦音調が現れる」という含意関係が見逃されている。第 2 に、疑問詞のアクセント型の消失に関わる含意関係が見逃されている。中澤発表 (中澤 2021) が論じるように、疑問詞のアクセント型の対立は日琉祖語にまで遡る特質であるため、これを欠く方言は「型の対立の消失」という変化を経験したことになる。佐藤 (2021b) の「疑問詞のアクセント型の対立」という項目を、表 2 のように「疑問詞のアクセント型の対立の消失」に置き換えると、表 1 の含意階層がより明確になる。

表 2. 佐藤 (2021b) 類型化の改定

	A 方言	B 方言	C 方言	D 方言	E 方言	F 方言
①不定表現 (隣接) における不定語の平坦音調		✓	✓	✓	✓	✓
②不定表現 (非隣接) における不定語の平坦音調			✓	✓	✓	✓
③疑問詞のアクセント型の対立の消失				✓	✓	✓
④不定表現における平坦音調の拡張					✓	✓
⑤疑問表現における平坦音調の拡張						✓

A 方言 田辺・富山・与那覇 B 方言 南さつま・皆愛 C 方言 京都・淡路・南国・多良間・与那国
D 方言 壱岐・東京 F 方言 福岡

したがって、疑問・不定表現における韻律現象に観察される含意関係は (2) に示す 4 つであって、2 つではない。

- (2)
- a. 疑問表現に平坦音調の拡張を起こす方言は⑤、不定表現にもそれを起こす④ (= (1b))
 - b. 不定表現に平坦音調の拡張を起こす方言は④、疑問詞のアクセント型の対立を失っている③
 - c. 疑問詞のアクセント型の対立を失った方言は③、不定表現 (非隣接) の不定語に平坦音調が現れる。
 - d. 不定表現 (非隣接) の不定語に平坦音調が現れる方言②は、不定表現 (隣接) の不定語に平坦音調が現れる① (= (1a))

(2) の含意階層は、疑問・不定表現における韻律現象に関わる変化が、表 2 の①、②、③、④、⑤の順に生じたことを示唆する。中澤発表 (中澤 2021, 5.2 節) は、問題の韻律現象を引き起こす契機が「不定詞+モ」の形式に生じた変化である可能性を指摘するが、この見解は (2) の含意階層から支持される。

中澤発表 (中澤 2021, 5.2 節) が明らかにしたように、不定語のアクセント型の変化を経験した諸方言の間には、不定語のアクセント型の規則的な対応が観察されない。セリック発表 (セリック 2021, 第 4 節) が皆愛方言、多良間方言に簡明に指摘するように、不定表現における不定語のアクセント型が統一される場合は、個々の方言の共時態においてピッチの変動がより少ない型 (すなわち平坦音調) が選ばれると見て差し支えない。アクセント型に方言間の規則的対応がないことと、諸方言が不定表現における不定語のアクセント型を平坦音調へと変化させていることを考慮すると、中澤が指摘するように、不定語のアクセント変化は、諸方言が規則的な音変化によってそのアクセント体系を組織的に変化させた後に、各方言で並行的に生じたと考えられることができる。重要なことは、それが各方言に独立に生じた変化 (並行変化) であるにも関わらず、すべての方言が共通の順序で変化を経験していることである。このことは、問題の変化は偶発的なものではなく、類型論的な傾向に従ったものであることを意味する。

では、その類型論的な傾向とはどのようなものであろうか。変化の過程は一見すると、不定語のアクセント型の平坦化が、その領域を語から文節へ、文節から句へと拡張し、さらに不定表現から疑問表現へと拡張していく過程であると要約できそうである。しかし事実はそれほど単純ではない。問題となるのは③の位置づけである。平坦音調の領域が文節を超えるという変化④⑤は、疑問詞のアクセント型の対立の消失③を必要条件としているが、③は必ずしも平坦音調への変化ではない。例えば、福岡方言では疑問詞のアクセント型が平坦音調に統一されているのに対して、東京方言と長崎方言では下降のある型に統一されている。このことは疑問詞のアクセント型の平坦化が、平坦音調の現れる領域の拡張④⑤の必要条件ではないことを意味する。もし疑問詞の平坦化が平坦音調拡張の必要条件でないのであれば、疑問詞間のアクセント型の対立 (例

¹ 佐藤 (2012, 3.2.2 節) は福岡方言と壱岐方言には平坦なアクセント型 (平板型) が存在しないとしているが、この見解は両方言の 2 拍 1-2 類、3 拍 1-4 類に対応する型を起伏型とみなす枠組みに基づいていると思われる。両方言には LH-H/ LHH-H と LH-L/ LHH-L の区別がなく、問題のアクセント型は単独では LH/ LHH、助詞付きでは LH-L/ LHH-L で現れる。これを起伏型とみるか平板型とみるかは理論に依存するだろう。これを平板型とみなす枠組みでは、不定表現・疑問表現では適用されない助詞のピッチを低く実現させる規則が定義されるだろう。

例えば「誰」と「何」の区別)を保持したまま、不定表現における平坦音調の拡張④が生じてもよさそうであるが、事実はそうではない。この点はさらに説明をする必要があるだろう。

長崎方言と東京方言では、疑問詞間のアクセント型の区別はないが、疑問詞と不定表現における不定語との間のアクセント型は、下降型と平坦音調とで区別されている。興味深いことに、この区別を持つ 2 方言には疑問表現における平坦音調の拡張⑤が生じていない。それに対して、疑問詞と不定語が平坦音調で統一されている福岡方言には⑤が生じている。この観察に基づいて、④と⑤の間に (3) を加えることが出来るかもしれない。

- (3) ④' 疑問詞と不定表現における不定語の平坦音調への統一

したがって、(4) の 5 つ階層的な含意関係を認めることができるかもしれない。

- (4) a. 疑問表現に平坦音調の拡張を起こす方言は⑤、疑問詞と不定語を平坦音調に統一している④'
b. 疑問詞と不定語を平坦音調に統一している方言④' は、不定表現に平坦音調の拡張を起こす④
c. 不定表現に平坦音調の拡張を起こす方言は④、疑問詞のアクセント型の対立を失っている③
d. 疑問詞のアクセント型の対立を失った方言は③、不定表現 (非隣接) の不定語に平坦音調が現れる。
e. 不定表現 (非隣接) の不定語に平坦音調が現れる方言②は、不定表現 (隣接) の不定語に平坦音調が現れる① (= (1a))

この含意階層が予測することは、もし長崎方言や東京方言のような体系が将来、福岡方言のように疑問表現に平坦音調の拡張を起こすようになるならば、この変化に先立って、疑問詞のアクセント型が平坦音調に統一されるという変化が生じるということである。

3. まとめ

疑問・不定表現における韻律現象をめぐる諸問題を類型論的、通時的観点から検討した本ワークショップの 3 発表は、当該現象に関する多くの知見を与えるものであった。今後、本ワークショップで提案された枠組みをさらに多くの言語・方言に適用することで、この問題に関する研究はさらに発展していくだろう。

引用文献

- セリックケナン (2021) 「南琉球宮古語の疑問・不定表現におけるアクセントの交替」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ. 11 月 21 日, オンライン.
- 五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションの言語類型論」窪菌晴夫・野田尚史・プラシャントパルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』東京: 開拓社.
- 中澤光平 (2021) 「疑問・不定表現における韻律現象の通時的考察」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ. 11 月 21 日, オンライン.
- Sato, Kumiko (2018) Intonational Patterns of [WH... C[+wh]] structures: Dialectal variation in Japanese. Paper presented at 5th International Conference on Phonetics and Phonology. NINJAL.
- 佐藤久美子 (2019) 「不定語のアクセントと不定語を含む文のイントネーション—東京・福岡・鹿児島・長崎の対照—」Prosody & Grammar Festa 3. 国立国語研究所.
- 佐藤久美子 (2021a) 「日琉諸語の疑問・不定表現をめぐる韻律現象：類型論的枠組みの提案と通時的考察」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ. 11 月 21 日, オンライン.
- 佐藤久美子 (2021b) 「日琉諸語の疑問・不定表現における韻律現象の類型化の提案」日本言語学会第 163 回大会ワークショップ. 11 月 21 日, オンライン.